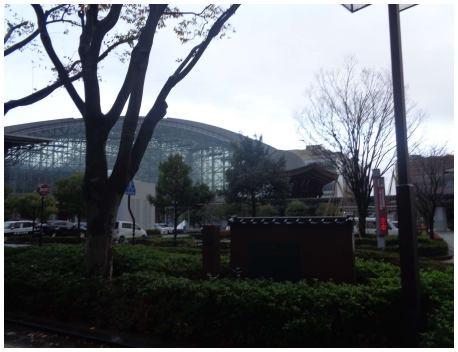
※

教育科学研究会通信

京都教科研例会案内 371 号

1 月号



冬の金沢駅

日時　2024 年 1 月 20 日（土）pm２時～（日程変更注意）
場所　乙訓教育会館
内容　第 353 回 1 月京都教科例会・懇親会（旬菜）

提起

保健室から見る家族と子どものリアル

—教育1月号　第1特集　山形論文を読みあう—

提起　　吉益　敏文（事務局）

新年あけましておめでとうございます。
1 月例会から開催時間を変更いたします。終了後、今回は新年会も含めて懇親会も予定しています。オンライン参加希望の方はおしらせください。URL 送信いたします。みなさんの参加をお待ちしています。

371 号目次

1，1 月例会案内		1
2，12 月例会報告	吉益　敏文	3
3, 特別寄稿　　福田村事件	中尾　忍	5
4，私の研究ノート（32）	佐藤　年明	8
5，連載（15）	野中一也	13
6，編集後記・ニュース		14

京都教育科学研究会第348回12月例会の報告

はじめに

12月例会は関西教科研の集会に合流しました。場所変更のお知らせが事前にあったのですが（若竹会館に変更）わたしが見過ごしていたため、当日、勤労会館にいかれた方に大変ごめいわくをおかけしてすいませんでした。私は寺井さんと現地であい、ご一緒できました。いくつか可能な範囲で連絡しましたが、もし行き違いがあればご容赦ください。

佐藤さんとは会場で合流しました。集会は西宮市民の方が多く、東京から学生の方の参加もあり50人近くの熱気のある素敵な集会でした。以下　例会報告の欄で紹介します。

連絡事項

〇1月からの例会について

1/20(土曜日)　2時～　　乙訓教育会館　　懇親会5時～旬菜（いつもの場所です）

子どもの権利と親子関係（1月号　山形論文を中心に）　　提起　吉益

※今後の開催時間について

午後2時開催　毎回　可能な範囲で「懇親会・食事会など」多様に考える。

状況をみて夜の会議、オンライン開催を考える。例えば1月は小さな新年会を企画。

体力も考え無理せず楽しく続ける事を優先する。基本は対面を重視する。第3土曜日を軸に柔軟に考える（以上の事務局案が11月例会参加者で確認しました。）

2/17(土)　　学問・研究の自由　　提起（案）葉狩さん　午後2時～

3/16（土）　地域と教育　　提起（案）芦田さん　午後2時～

提起

保護者が知りたい教師の本音と現実

提起　　鈴木　大祐氏

例会報告　※いつものように吉益の覚書で録音おこしではありません。ご容赦ください。

〇はじめに３人の方が問題提起されました。わが子が不登校になり、今の学校教育のありかたに疑問をもっておられる保護者、理不尽な保護者の「クレーム」から休職した教師、今、毎日、学校に行くのが楽しい教師、保護者、教師それぞれの立場から今の学校の状況が語られました。そのあと鈴木さんが講演されました。

鈴木報告の要旨

世の中、新自由主義の時代　教育がサービス業になっている。お客様を相手にする。保護者、子どもの顔色をきにするようになってきた。自分の恩師が「子どもの顔色を見るだけでは子どもは育たない」とよく言っていたが、まさにそうだと思っている。

しかし、サービス業に徹するとどうなるか、学力向上、生徒指導のマニュアル化が中心になってくる。　生徒の成長より行政への説明責任が重視されるようになる。北海道のわいせつ画像の拡散で子どもが自殺した事件があったが、そのことを象徴しているのではないか。対応した教頭は「校内で起きたことではない」と返答し、連絡を受けた担任は「今、デート中です。勤務時間外なので明日にしてください」と答えたという。法律上では何もおかしなことを言ってない。被害者に対して加害者生徒は「何も思わない」と答えたという。ここに教育が奪われている実態があります。

西日本新聞に６年生の手記が掲載されました。大人に聞いてほしいというタイトルで「僕たちはロボットではない」という主旨の内容でした。子どもたちにとって学校とは何でしょうか？全国一斉休校をコロナ禍で強行された時、保護者から「どうしてくれるんだ」という怒りの声が巻き起こりました。そこで政府が行ったことは「学びをなくしてはいけない」ということで、全国のいたるところにアイパットを用意しました。そこでオンライン授業が始まると、保護者からまたブーイングがおこりました。「塾のオンライン授業と重なるのでやめてほしい」と。オンライン授業でいえば塾や予備校は設備もノウハウも整っているのです。学校教育ではたちうちができません。学校は塾ではない、これまでの学びはどうだったのかが問われたのです。

なぜ　　こんなに教員が病んでいるのでしょうか、一斉休校のお願いがでた時、どこも右へ習えで従いました。教育における地方自治が機能していません。職員会議が伝達だけになっています。言いたいことが言えない教員の現状です。これで子どもが育つのでしょうか。

構想と実行が分離されています。M 先生という私の尊敬する先生がいます。時には優しく、時には厳しく　子どもたちからも保護者からも慕われていました。人間主導なのです。

はやりの ICT 教育の中で、ある教員が「スカイメニューを使えば机間巡視は要りませんよ。瞬時で子どもの様子がわかります」と豪語したそうです。ベテランの教師が違和感をもちました。机間巡視する中で、子どものちょっとした表情、しぐさ、においからその微妙な変化がわかるのではないかと。単なる効率重視は教育とはいえないのではないでしょうか。人格の完成をめざす、それが教育ではないでしょうか。

学力テストの結果をよくすることが教育でしょうか。秋田県、福井県、石川県いくつかの件が学力テストの結果の上位をしめています。調査のための教育になっています。だから議員が教育介入して「学力はどうなっているのか」と議会で質問したりするのです。学校教育における教育の構想と分離は労働からの疎外です。時間だけの短縮では解決できないのです。これから多忙化解消だけにとらわれないことが大切です。労働からの疎外感、教員が使いすて労働者になってしまいます。

鈴木さんの問題提起のあとグループに分かれて交流しました。グループからの発言をうけて鈴木さんが以下のようにまとめ発言をされました。

〇教員でできることを明らかにしよう。今、文化人類学から学んでいます。他者と出会うその中で私が息づく。私たちが作っていく社会は変えていくことができる。スキマに生きる、義理と人情で生きる。タネが希望に。そこに未来がある。西宮の集まりはその一つの例だと思う。

冒頭の３人の方のリアルな報告、鈴木さんの講演と、どれも聞きごたえがありました。そのあとのグループ論議が面白く、西宮市民の会の方がそれぞれ司会をされ自由な意見交換ができました。これがまた楽しかったです。参加した佐藤さん、寺井さんと「市民の方、学生、教師、研究者と様々な立場な人たちがそれぞれのポジションから発言されているのがすごいですね」と語り合いました。関西教科研　すてきなひとときでした。

特別寄稿

「(朝)鮮人なら殺してもええんか！」が胸に突き刺さる･･映画『福田村事件』を観て

香川民研事務局長　中尾　忍

ドキュメンタリー映画で有名な森達也監督のはじめての劇映画『福田村事件』が９月１日から全国で上映。香川でも同じ９月１日から 10 月５日までのロングラン。ソレイユ・ソレイユ２で上映されました（最初はソレイユの２つの映画館で５回上映）。

ちょうど 100 年前の 1923 年９月１日、関東大震災が起こります。(国の中央防災会議の報告書(2008 年)震災の死者・行方不明者約 10 万５千人）９月２日戒厳令施行（水野錬太郎内務大臣）後、「朝鮮人が井戸に毒を入れた」「火をつけた」などの流言飛語（デマ）が広がり、国家の命で自警団などが組織され、民衆や軍、警察によって各地で６千人以上の朝鮮人、中国人や川合義虎ら社会主義者たち、大杉栄らが虐殺されました。

当時内務省後藤文夫警保局長は、水野に戒厳令施行を進言。「朝鮮人騒動」の確証がない中、朝鮮人の厳重なる取締りを命じた文書を海軍船橋送信所から３日午前８時 15 分各地方長官に送信。治安当局（警察・内務省）が自警団の暴走を招いたといえます。[1]（高麗博物館　関東大震災 100 年隠蔽された朝鮮人虐殺　改訂版より）

そんな中９月６日千葉県福田村（現在野田市）に薬の行商に来ていた香川の被差別部落の 15 人のうち幼いこどもや妊婦を含む９人（胎児を含めて 10 人）が「朝鮮人ではないか」と疑われ殺されました。事件後、殺害を主導した自警団８人（旧福田村４人・旧田中村（現柏市）４人（福田村・田中村事件ともいう）が有罪判決を受けたものの、大正天皇の崩御に伴う恩赦で釈放され、旧田中村の一人は村長までなったといいます。

この事件を基調に、３人の脚本家・森監督によって脚色され、映画化されて全国で話題になっています。

この福田村事件は、長い間闇に葬られていました。福田村では、野田市史にも一切書かれておらず、しゃべることもタブーでした。被害者であった香川の生存者６名も命からがら帰りましたが、なかなか取り合ってもらえませんでした。

このことがわかったのは今から 40 年前（事件から 60 年後）千葉の朝鮮人虐殺の歴史を調べていた人たちからでした。[2]絶版の青木書店「いわれなく殺された人々　関東大震災と朝鮮人」千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会（1978 年６月結成）編　代表高橋益雄　1983 年９月１日発行）の「Ⅳ名のりあげた遺族―『殺されたのは朝鮮人ばかりではありません』」に詳細が記述されています。[2,5]

「『殺されたのは、朝鮮人ばかりではありません。日本人も殺されたのです。私のおじさん、おばさん、一緒にいた赤坊まで殺されました。その場所を探してください』という電話をいただいたのは 1979 年（昭和 54 年）の９月１日に『資料集第２集』（関東大震災と朝鮮人―習志野騎兵連隊とその周辺―）が『朝日新聞』に報道されてまもなくであった。」と。

新聞を読んだ福田村事件の被害者の遺族から千葉の方たちを訪ねてこられ、そこから事件のことが明るみになっていきます。『関東大震災と治安回顧』(吉河光貞著 1949 年９月　法務府特別審査局）によると政府資料では福田村事件のことは 1949 年に記録されています。[6]

遺族（仮名小田さん）が千葉の歴教協（平形千恵子さん・大竹米子さん）の二人に会いに行きます。そして、実際の現場（三ツ堀・香取神社など）を訪れ供養したこと、聞き取ったことなどがその本に詳細に書かれています。

1983 年、千葉の歴教協（平形千恵子さん・大竹米子さん）から福田村事件の詳しいことを調べてほしいと香川の歴教協石井雍大さんに依頼があります。同じ会員で高校教諭久保道生さんとともに調査・研究がはじまります。(映画『福田村事件』のパンフレット 21p の年表に記載[4])。しかし、なかなかみつからず、やっと 1984 年、小田さんの探していた遺族がわかります。そして、だんだん全容がわかってきます。

1986 年４月ついに生存者１名を突き止め、聞き取りが行われ、５月には２回目の聞き取り。その時にその方は仏壇から手記を石井さんに手渡されます（和紙４枚の表裏にびっしり書かれています。これは辻野弥生さんの『福田村事件』の本の最後に記載されています。後に石井雍大さんはこの手記を香川県立文書館に渡されたこともこの本に書かれています)。[3]

７月に石井雍大さんは「草稿」(香川県の出版物）２号に「関東大震災・もう一つの悲劇」と、はじめてこの事件のことを発表しました。さらに、1986 年９月には２人目の生存者がわかり、聞き取りを行います。その後石井さんは 1989 年２月に高同研第十二号「いわれなく殺された人びと」。1994 年単行本『青い目の人形』に「いわれなく殺された人びと」を発表。そして 1999 年、香川の方々と一緒に千葉県の野田市に赴き、両者の話し合いがはじめておこなわれます。

2000 年、香川で「千葉福田村事件真相調査会」が、千葉で「福田村事件を心に刻む会」が結成され、80 周年の 2003 年に追悼碑をつくろうということになりカンパを集め、ついに三ツ堀の近くに「関東大震災福田村事件犠牲者追悼慰霊碑(墓碑)」が 2003 年９月６日建立されます。

石井雍大さんらがつないだ碑と言えます。同時にこの福田村事件を調査・研究していた千葉県流山市の辻野弥生さんが 2013 年に初版の『福田村事件』の本を出版（しかし出版社が倒産し絶版に)、観音寺にも講演に来られました。その後、石井雍大さんとの交流が行われ（映画福田村事件のパンフレット 35p に石井さんから辻野さんへの手紙掲載)、2023 年６月 24 日に五月書房新社から『福田村事件』増補改訂版として出版します。[3]そこには、森達也監督の特別寄稿も掲載されています。福田村事件の映画へとつながっていったわけです。

千葉の歴教協の方々、香川の石井雍大さんと久保道生さんの粘り強い、地道な調査と研究があったからこそ事件のほぼ全容が分かり、遺族の方の願いも実現し、追悼慰霊碑もできたのです。

石井さんは『季論』（本の泉社）2013 年夏号に「関東大震災・もう一つの悲劇　福田村事件―朝鮮人と誤認されて殺された人びと」を発表。他にも講演・発表多数あります。

（最後に。殺される命なんてない。）

ロシアのウクライナ侵攻、ハマスとイスラエルの戦い、膨大な数の人命が失われています。胸が塞がる思いです。世界の、日本の長い歴史の中で多くの命が虫けらのように失われてきました。不慮の事故や病気でなく、愚かな戦争で、殺戮で、また関東大震災の流言飛語の中で、国家（政府）の責任で何千人もの虐殺が行われてきたのです。

松野官房長官は政府の記録に「虐殺の事実はない」と公然と嘘を言い、小池東京都知事は歴代都知事が行ってきた朝鮮人への追悼の意を表していません。

私たちは過去の歴史から何を学び、これからどう生きていくのか、深く考えなければならないと思います。

やっと野田市の鈴木有市長は今年６月の市議会本議会で、「被害に遭われた方々に対し謹んで哀悼の誠をささげたいと思います」と答弁し、市長としてはじめて議会の場で被害者への弔意を示したといいます。（毎日新聞 2023 年９月６日付）

また、柏市の太田和美市長も 2023 年９月 21 日、市議会定例会の答弁で「亡くなった命の尊さを思うと誠に心が痛む」と哀悼の気持ちを示したといいます。市が議会で犠牲者らに弔意を示すのははじめてとみられています。（2023 年９月 22 日千葉日報）

辻野弥生さんは、パンフレットの中で「なかったことにはできない」と言っています[4]。毎日新聞 2023 年９月６日付「地元の惨劇　伝えていかねば」では、久保道生氏の「福田村の人が特別に残忍だったわけではない。当時、デマの拡散に国が関わり、取り締まりを命じてそれに群衆が踊らされた。どこでも起きえた事件だ。そういう意味では国家による犯罪だった」と語っています。そして、石井さんのこんな言葉を残していると。

「差別や偏見は単に人権を侵すことにとどまらず、それを拡大していくとつまるところ、ついには人間そのものを抹殺してしまう」（世界史としての関東大震災）と。

私は 10 月 20 日から 24 日まで４泊５日、総勢 15 名で「韓国平和の旅 2023・香川」として、日本が戦前おこした侵略戦争や植民地支配により韓国をはじめアジアの人々に筆舌に尽くせない苦しみを負わせた歴史を決して繰り返さないために、2016 年 2019 年に続いて 3 回目の旅の実施で、「関東大震災 100 年―隠蔽された朝鮮人虐殺」の日本の高麗博物館と連携展示しているソウルの植民地歴史博物館の見学、金英丸（キムヨンファン）さんとの交流、さらに光州、4.3 事件があったチェジュ島を訪れることになっています。

【参考文献】

[1]・高麗博物館　関東大震災 100 年　隠蔽された朝鮮人虐殺　改訂版
（2023 年７月５日発行９月１日改訂版）
[2]・『いわれなく殺された人々　関東大震災と朝鮮人』青木書店

千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会（1978 年６月結成）
編　代表高橋益雄　1983 年９月１日発行）

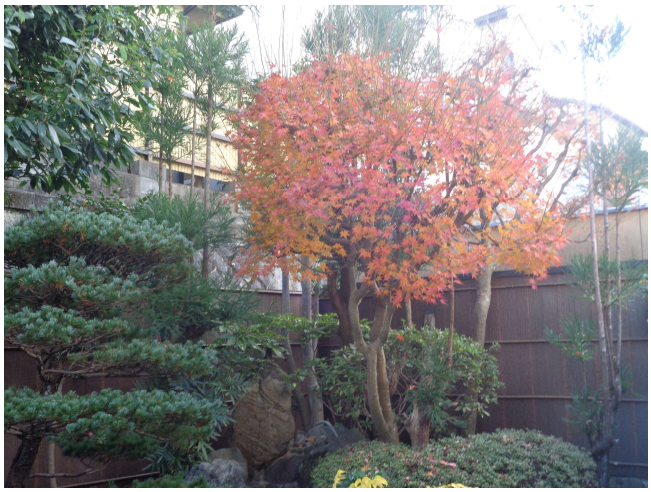
[3]・『福田村事件　　関東大震災・知られざる悲劇』辻野弥生著
五月書房新社　2023 年６月 24 日

[4]・映画『福田村事件』公式パンフレット　　2023 年９月１日発行　太秦株式会社

[5]・平形千恵子　「Ⅳ　名のりあげた遺族―「殺されたのは朝鮮人ばかりではありません」前出『いわれなく殺された人々　関東大震災と朝鮮人』青木書店　所収　154ｐ～163p

[6]・『関東大震災と治安回顧』（吉河光貞著 1949 年９月）法務府特別審査局

※香川民研だよりに投稿されたものを中尾さんの了解をえて、ここに転載します。
うずもれた歴史　の真実がひとつひとつ明らかにされていきますね。　中野さんの研究は続きます。



つかのまの秋の風景
今年は紅葉がおそくその分　紅葉鑑賞が少し楽しめた？かもしれませんね。

連載・私の研究ノート（第 32 回）　　（京都教科研通信第 371 号　2024.1）

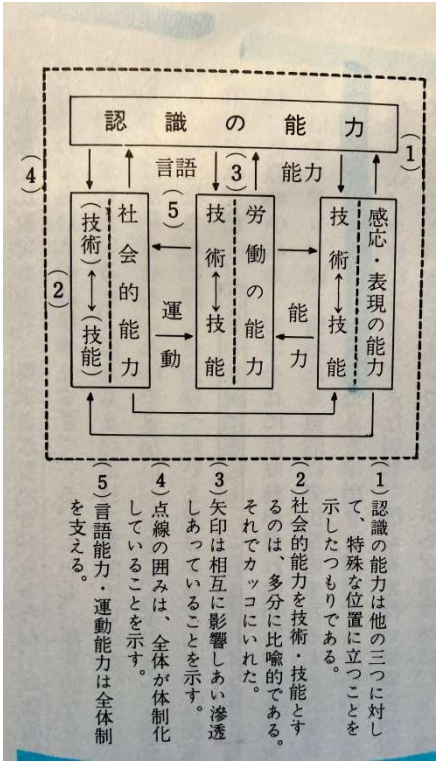
勝田守一『能力と発達と学習―教育学入門Ⅰ』(1964)

【4回目】　　佐藤　年明

前回は、自分の卒業論文記述を介して勝田の本書を学び直すという作業のとっかかりについたばかりで、さっそく卒業論文での勝田能力論の読みの浅さに気づいたというお粗末な結末で終わりました。

さて、次に進みましょう。前回再掲載した佐藤卒業論文第二章第一声冒頭に出てくる、各方面

で繰り返し引用されてきた勝田による能力の4カテゴリについてです。これはどうしても図を入れる必要がありますね。右の通りです（今後しばしば言及するので、「P.54 図」と略称することにします）。



22歳の私は、「人間の能力はそれが生み出す社会的価値の違いによって、次の四つの相対的に独自なカテゴリーに区別される」として「P.54 図」自体も論文の註記の中で紹介し、「勝田は、これら四つの能力のカテゴリーの中で、認識の能力をとりわけ重視している。」「現代においては、自然・社会を科学的に認識する能力が人間的能力の中で重要な位置を占めるのである。また、四つのカテゴリー相互の基本的な関係においても、知的認識は、他のカテゴリーの能力に『浸透』(P.77)することによってその本質的特殊性を一層発揮させるという特殊な関係にある。」として、認識の問題という自分の関心の方へ引っ張っていこうとしています。ただ改めて原文を検討する際には、前回連載で引用した本書 P.50 にすぐ続く以下の部分を見逃すわけにはいきません。

【ここで、私たちは、二つのだいじなことを考えておきたい。一つは、人間の能力というとらえ方で私たちが思いうかべる力は多様だが、それを、社会との関係でいくつかのカテゴリーに整理することができるかどうかということである。もう一つは、多様な力を、個人がひとりで多面的にもつことができるのだが、それらは、相互に関係しあい浸透しあっているのか、それとも別々の能力という形で所有されているのか、という問題である。前者は、社会的な側面から、私たちの子どもが、『能力を身につけていく』ばあいに、どんな価値内容を選択すべきかという問題に光を投げてくれる。そして後者は、その学習の仕方、順序、関連、を考えていく上に、私たちの実践に具体的な作業仮説を導くためにみておかなければならない主体的な側面だといっていい。とはいっても、この二つの側面は、決して切り離されはしない。ということは、社会のあり方の中で、個々の能力といわれるものの『とらえ方』や『身につけ方』がちがうということも考慮にいれなければならないからである。】(P.50-51 下線は佐藤)

他の学問分野のことはわかりませんが、教育学の世界で上記のような図示が行なわれると、原文を離れてその図の解釈が一人歩きしてしまう傾向があるんじゃないかと思います。勝田教育学を学ぶ際にそうした傾向はあったのかなかったのかわかりませんが、ともかく私自身は、原典に立ち戻って勝田がこの図で表現しようとしたことをまずは忠実に理解したいという思いがあります。

上記引用部分に続けて、勝田は4つのカテゴリーのそれぞれを説明しますが、その説明は上記引用のうちの人間の能力を捉える第一の視点から、つまり「社会との関係で」のカテゴリー整理です。4カテゴリーの説明（あとで言及します）を終えた上で勝田はこう述べます。

【おおまかに、能力の4つのカテゴリーを区別してみたが、それらは相互に影響しあいながら、しかも独自で固有な本質的性格をおびていることが明らかだ。そこで、それを上のようなあまりうまくないが、しかし単純化した図表にまとめてみる。】(P.55)

こうして「P.54 図」を提示しておいて、勝田はさらに続けて以下のように述べます。

【さっき提示しておいた第二の問題<佐藤註：個人がひとりで多面的にもつことができる多様な力は、相互に関係しあい浸透しあっているのか、それとも別々の能力という形で所有されているのか>にはいらなければならぬ。別のいい方をすれば、個々の能力といわれるものが、ひとりの主体に統一されるとすれば、その統一をどうとらえたらよいのかということになる。ここでお断りしておかなければならないのは、能力を四つのカテゴリーに分けたのは、昔の能力心理学とはなんの関係もないということである。能力心理学は、内省によって、心理現象を、ふつう知・情・意に分けてしらべるものだ。私のカテゴリーは、社会の中の人間行動によって、質のちがう価値を生み出す能力の領域である。そのちがいは、明らかだろう。私のそれには壁はないのだ。】(P.55　下線は佐藤)

まだまだ叙述は続くのですが、フォローを続けるとおもしろすぎて勝田ワールドにはまってしまう(^^;)というか、私のコメントを差し挟もうにも巻き込まれてしまって抜け出せなくなりそうなので(^^;)、続く部分は後に回すことにして、ここで考察を加えておきます。

先に《教育学の世界で起こり得る傾向》として、図を使って示されたある理念について、「その図の解釈が一人歩きしてしまう傾向」と述べました。もう少し言うと、理念はあくまでも言語によって示されその理解を容易にするために図が用いられるという関係であるにも関わらず、図は一望の下に把握できるために、図の理解から出発して理念を解釈し、文章に戻らずのその解釈を固定してしまう傾向、ということです。戦後教育学の古典的文献の一つである本書から学ぼうとする際に「P.54 図」はしばしば引用紹介されます。誰のどの文献での紹介がどうということを言っているのではないんですが、タイトルがついていない「P.54 図」を《勝田の能力構造図》みたいな形で紹介される場合があると思うんです。「能力構造図」と誰かが言ったわけではなく私が勝手に命名したんですが、上記の図はそもそも「能力構造図」なんでしょうか。「〇〇能力」と命名された認識―、感応―・表現、労働―、社会的―、言語―、運動―という6つのカテゴリー間の相互関係を矢印で表現した(さらには技術と技能の往復運動の記載もある)図なんですが、それではここで表示されている諸能力とは、一個人の中に具わっている、あるいは具わるべき能力を示しているんでしょうか？

P.50 以降の叙述を辿り直してみると、勝田は能力をめぐって2つの問いを設定し、そのうちの第1の問い、すなわち「人間の能力というとらえ方で私たちが思いうかべる力は多様だが、それを、社会との関係でいくつかのカテゴリーに整理することができるかどうか」という問いに応えようとします。この問いへの「答え」の部分の紹介をここまで省略してきましたが、その部分の叙述は以下のようにすすめられています。

【なにより、生産の技術に関する能力を、はじめに私たちは考える。これを広い意味の労働技術の

能力とよんでいいように思う。（後略）】(P.50)
【次に考えられるのは、人間の諸関係を統制したり、調整したり、変革したりする能力である。この能力をもっぱら生涯の仕事に使っていくのはいわゆる政治家だ。（後略）】(P.52)
【第三には、科学的能力とよばれる自然と社会についての認識の力である。これは、現代社会では、とくに大きな比重をもって、要求されている。（後略）】(P.52-53)
【第四には、私は、世界の状況に感応し、これを表現する能力を考えたい。私たちの存在そのものは、つねに世界の中にあって、それに揺り動かされながら内的な状況を変化させ、これを外に向かって表現している。（後略）】(P.53)

この叙述の流れと「P.54 図」とを対照して見ると、図中段の縦書きで並列された3つのカテゴリーのうちまずまん中の労働の能力が説明され、次に左隣の「社会的能力」、そして次は右端へは行かず、3カテゴリーの上部に横書きされた「認識の能力」を説明し、最後に中段右側の「感応・表現の能力」を説明します。この文章による説明の流れから、勝田自身は上述の能力の4カテゴリーに関して、どれが中核でどれが周辺だとか、どれが土台でどれが上部だとかを言おうとしていないことがわかります。「P.54 図」の形状から勝手に推測して《勝田の能力構造》を説明してはいけないと思います。

ちょっと話を戻すと、「P.54 図」は勝田の《第１の問い》に答える叙述の末尾に示されたものでした。この問いの説明で勝田は人間の能力を「社会との関係でいくつかのカテゴリーに整理する」と書いています。個人の能力構造図を描くと言っているのではなく、個人と社会の関係の中で期待される諸能力をカテゴリー分けしてみよう、ということ。「P.54 図」は、個人の体内？脳内？を示すものではないのです。

このことを 22 歳の私がどれほど意識できていたか。覚束ないものがあります。卒業論文第二章第一節冒頭で「勝田守一は、客観的実在に対する知的認識の能力を、人間の諸能力の中で特に重視し」と書き、自分の関心事である「（知的）認識」の問題へと話を引っ張っていきたいという非常に狭い研究関心から勝田能力論をとらえていました。

ところで、第１の問い関連はそういうことなのですが、勝田は続く第２の問いで、《個人の多様な能力が相互に関係・浸透しあっているのか、それとも別々の能力という形で所有されているのか》の検討に進みます。これは個人内の問題です。だとすると、「P.54 図」を、個人の能力構造図としても読んでいいのか？

ここで話は P.55 に戻ってきます。関係する部分だけもう一度引用します。
【個々の能力といわれるものが、ひとりの主体に統一されるとすれば、その統一をどうとらえたらよいのか】
【能力心理学は、内省によって、心理現象を、ふつう知・情・意に分けてしらべるものだ。私のカテゴリーは、社会の中の人間行動によって、質のちがう価値を生み出す能力の領域である。そのちがいは、明らかだろう。私のそれには壁はないのだ。】

一つ目の引用からわかるように、勝田は個人の諸能力が「主体に統一される」ことを前提として

います。ここは極めて重要な人間観であり、全国一斉学力テスト批判などにもつながっていくと推測します。諸能力は個人の中にバラバラに存在するのではない。「主体に統一される」のです。

二つ目の引用。私は「能力心理学」については全くわからないのですが、心理現象を「知・情・意に分けてしらべる」ことについて勝田が批判的であることはわかります。勝田は自ら整理を試みた諸能力のカテゴリーが人間の社会的行動によって「質のちがう価値を生み出す能力の領域」であり、諸カテゴリーの間に「壁はない」というのです。人間のいくつもの能力というのは幕の内弁当のように仕切られて配置されていてそれぞれ別々に働くものではなく、人間が行動する過程で動的相互連携的に働きながら（註：ここは佐藤の解釈）、それぞれ質の違う価値を生み出すのであり、棲み分けているのでなく連携し合っているのだ（註：ここも佐藤の解釈）と。つまり勝田の図を《幕の内弁当的な能力構造図》と解釈することは誤りだと思います。誰もそんな解釈をしていないなら文字どおり蟷螂の斧ですが、22 歳の自分の解釈の浅さを反省しながら、ここで確認しておこうと思います。

今回は長い文章になってしまいました。すみません。「P.54 図」から本書原文に立ち戻っての勝田能力論の学び直し作業は、本書**「第一章人間の能力をどうとらえるか （五)能力の定義」** の後半部分(P.55-58)の検討をまだ残しています。しかしこれまでの4回の検討作業で、著作集で 230 ページ分ほどある本書（もちろんこの連載で検討しようとしているのはその一部分なのですが）のうちまだ6ページ分ほどしか言及できていません。

実はここまで連載4回分の原稿を一気に書いてきたのですが、これによって猶予された数ヶ月間に、**「第一章人間の能力をどうとらえるか （五)能力の定義」**の学び直し作業をまだ続けるのか、それとも卒業論文の叙述に立ち戻って次に進むのかを検討したいと思います。

佐藤さんが紹介された勝田の表は色々なところで引用されています。
佐藤さんは2つの問いと過去の自分の認識をふりかえりながら読みとこうとされています。では能力とは何かという問いを突き付けられたとすると、私たちはどのように考えていけばいいのでしょうか？　連載は続きます。

連載 15

“　日本が犯した「悪」を想起しょう　”

野中　一也（京都教科研顧問）

イスラエルはパレスチナ自治区ガザへの侵略をしています。イスラエル兵は人間的感情を全く喪失した凶暴的人間になって子ども・女性を殺害していると容易に想像されます。

侵略兵の凶暴的行動は、かっての日本が犯した残虐行為を次から次へと「想起」させてくれます。「想起」とは、過去の事実が内面に浮かんできてそれに現在においての新しい意味を付け加えることであると理解します。

まず浮かぶのは、父の転勤で 1939（昭 14）年頃南洋パラオ諸島で地域住民を「土人」と呼んで使用人にしていたことです。今思うと上からの目線で悲しくなります。

私は、1941(昭 16）年、国民学校 1 年生で校門に入るとまず「奉安殿」に最敬礼し、儀式の時は「教育勅語」が校長によって「奉読」されて頭を下げて聞きました。敗戦と同時に「奉安殿」は消えていきます。そして毎日教科書の文字を墨で黒く塗りました。教える部分が無くなると空き時間に黒い部分を窓ガラスに写してくすっと笑ったりしました。今まで教えられてきた教科書が「偽善」だったというのです。教師は「今までのことには触れない、話さない」という姿勢になりました。

自分で考えることの大切さを教えられました。そして神国日本軍隊の非人間的行為に「遭遇」するようになりました。例えば、731 部隊の麻酔なしの人体実験は京大医学部の「関係者」が関わったのを知りました。

南京事件を引き起こした帝国軍人たちが、南京近郊の家に侵入し略奪を繰り返しました。ある家では命を乞う母と息子に「命欲しければ眼前で性交すれば許す」と告げ、母と息子が耐えがたい非人間になって行為をしたが日本軍人はいとも簡単に殺害したと言います。

岸田内閣は台湾に行って「戦う心が大事だ」と言ったりします。日本が犯した「罪」を通過します。罪を「悪」と捉え、心に良心が芽生えて「生きる」ことが大切だと思います。

日本の非人間的蛮行を深く「想起」して、「永遠平和」の理想を抱きながら未来に向かって生きたいと願っています。

顧問　野中一也氏の渾身のエッセイ。新年号の巻頭メッセージです。
今、一人ひとりに何ができるのか、新年にじっくり深く考えてみたいものです。次回は渡部代表です。

読書・映画・DVD・CD 情報（趣味的ですいません）

① 親密な手紙　大江健三郎　岩波新書

雑誌『図書』に連載されたエッセイをまとめたもの。最終校正はできなかったが大江が連載原稿に手をいれた文章で構成されている。日常の風景を鋭く深くとらえているところはさすがだとうなってしまう。

② アイヒマンと日本人　山崎雅弘　扶桑社新書

アイヒマンの生涯をたどりながら今の日本人が批判的にみるのでなく共感的同情的にみるのではないかという問いからはじまっている。組織に従順はまじめであるといえるのか、ナチスのユダヤ人虐殺とあわせて考えさせられる。

③ キネマの神様　ディレクターズカット　原田マハ　文藝春秋

原田マハの原作に感動した山田洋次。その映画と脚本に感動した作家の原田マハ。自らが脚本を書き直して小説に。沢田研二。北川景子。読んでいると再び蘇る。ラストの寺島しのぶのセリフに目頭が熱くなる。

○ 窓ぎわのトットちゃん　東宝　2023　アニメ

黒柳徹子のベストセラー『窓ぎわのトットちゃん』の続編が出版された。黒柳が今という時代に焦点をあて平和への思いをこめて少女時代の回想を番を持して書き下ろしたものをアニメで映画化。一人ひとりを大切にしたトモエ学園、校長先生のこと、亡くなった友人のこと、一つ一つのエピソードが涙をさそう、黒柳みずからが頼んだあいみょんの新曲「あのね」がラストを飾る。

編集後記・よもやま話

※371 号は関西教科研集会のスケッチ風報告、野中代表の渾身のエッセイを中心に編集しました。香川の中尾さんから 370 号に続き特別寄稿をいただきました。感謝です。好評の佐藤連載は勝田の能力 4 領域の解説です。新年１月号、お好きなところからおよみください。

※政治と金の問題が深刻なものに。自民党の腐敗堕落が明白に。東京地検が自民党の派閥事務所を強制捜査する事態となりました。中途半端に終わらず徹底的に真相を明らかにしてほしいです。政治不信から政治に希望が持てる年にしたいものです。

※野球の大谷、ボクシングの井上、将棋の藤井と若い人たちの活躍が胸をうちます。それは若さの輝きはもちろんですが、彼らのあくなき向上心、リスクを恐れず挑戦する姿勢に共感と感動がうまれるからではないでしょうか。年を重ねてもその姿勢は大事にしたいです。同じようにはいきませんがそれなりにボチボチと。

※2024 年　京都教科研 33 年目の始動です。今年もよろしくお願いします。